

ラオスにいったい何があるというんですか？

——ラオスみて歩き

2024年7月

昨年3月にインドネシアを訪問しました(2023年8月号に寄稿)。今年3月に東南アジアの未訪問国の一つラオスを見てきましたので、今年のASEAN議長国でもあるラオスの現在の様子を紹介します。ツアーではなく個人旅行でしたので、偏ったものになるかも知れませんがご容赦下さい。

忘れられた国？

『ラオスにいったい何があるというんですか？』は村上春樹の紀行エッセイの書籍名です。多くの人にとってラオスは未知の国、忘れられた存在ではないでしょうか。正式名称は「ラオス人民民主共和国」でラオス人民革命党の一党独裁、社会主義国です。人口は約730万人、面積は23.7万平方キロ(本州とほぼ同じ)で内陸国、1人あたりGDPは約2000ドル(ミャンマー、カンボジアよりは多い)、言語はラーオ語、民族は半分を占めるラーオ族と約50の少数民族です。「鎖国政策」をとっていた時期もあり、グローバル化から取り残された感もありますが現在は中国、韓国、日本などの企業も進出し、急速に経済が拡大しています。

仏教が生活に根づいている

海外から観光客を集めているのは、世界遺産の古都・ルアンパバーンです。メコン川中流域の山間地にあるこの街には高層ビルは一切なく、人と車、バイク、自転車が静かに(車はクラクションを鳴らさないの)共存しています。観光客の目当ては、毎日行われている早朝のお坊さんたち(その多くは少年僧)の托鉢を見学することです。オレンジ色の僧服をまとった何百人もの僧たちがそこかしこの寺院から出てきて、街の住民から餅米などの食べ物を受け取る光景は見事! 何百年も続く托鉢ですが、欧米や中国からの観光客があまりに多く傍若無人にスマホをかざしたりして進路を妨害することもあり、やや興ざめする場面もあります。けれども一見の価値はあります、これ以上観光ビジネスに取り込まれる前に一見をどうぞ。

首都ビエンチャンは発展中!

ホーチミンやバンコク、マニラなどに比べれば、とても首都とは言えない、活気のある地方都市のようなビエンチャンですが、高層ビルもチラホラ見られ、ショッピングセンターも最近オープンしました。ビエンチャンはメコン川に面していますが、対岸はタイですので、タイの通貨バーツが普通に使えますし、タイと行き来する国際バスも走っています。車の大半はトヨタ・ホンダなど日本車ですが、中国製電気自動車も販売されています。韓国との直行便が何本も飛び、韓国の企業と観光客も目立っていました。ラオスの平均年齢は22歳、子どもたちも元気に走り回っています。

2022年、中国ラオス鉄道が開通

中国南部・雲南省の省都・昆明からビエンチャンまでの鉄道が中国の投資と技術によって開通し、中国の鉄道網に直結しました。山岳地帯に建設されたこの鉄道は、ラオスにはあまりに不釣り合いな巨大な駅と高規格の線路を備えています。中国による「債務の罠」にも思えます。この鉄道では旅客列車よりも貨物列車が多く運行されていました。メコン川を渡ってタイの鉄道網に接続して海に出るルートも準備しているようです。

日本のバスが走る

「From the People of Japan」というシールを貼った路線バスがビエンチャン市内を走っています。JICA(国際協力機構)が数十年前に贈ったバスのようですが、かなり老朽化してしま

た。トマホーク1発分(6億円)ですべてのバスを更新できるはずで、人々の生活向上のために、バスの更新が急がれます。

不発弾の被害と処理が続く

ベトナム戦争とその後の内戦で、200万トン以上もの爆弾が米軍機によって投下され、その中の特にクラスター爆弾が不発弾として残り、今も被害が続いています。ルアンパバーンにはUNESCOの「ラオス不発弾処理プロジェクト・ビジターセンター」があり、クラスター爆弾とその不発弾処理の様子が展示されていました。ビエンチャンにも「コープ・ビジターセンター」(アメリカの民間団体運営)があり、不発弾の被害とその被害者への支援の様子が展示されていました。忘れてはならないラオスの現実です。

AALAは今年12月に「ラオス 平和交流の旅」を計画していますので、百聞は一見にしかず、訪問されてはいかがでしょうか。

